

はじめに

本書は、著者4名のグローバルヘルス外交の実践と教育の両面における豊富な経験をもとに作成されている。私たちは過去10年間、スイスのジュネーブにある国際・開発研究大学院（以下、「GI」）、及び他の多くの国の同様の機関で講義を行ってきた。この間、世界は多くの変化と混乱を経験し、そのすべてがグローバルヘルス外交の根底にある価値観、アプローチ、メカニズムに反映されるようになった。本稿執筆時点では、COVID-19のパンデミックが多国間システムに大きな影響を与え、グローバルヘルス外交の主体や舞台の範囲を広げている。

2013年、GI グローバルヘルス・センターは、グローバルヘルス外交の分野について、主要な概念、論点、アクター、手段、フォーラム、事例を概説した初の体系的な入門書を出版した。¹ 本書は、その流れをさらに推し進め、グローバルヘルス外交の実践的側面に焦点を当て、この分野における新たな経験や発展も踏まえている。

本書では、特に世界保健機関（WHO）とジュネーブのグローバルヘルスの「エコシステム」での交渉に焦点を当てている。保健分野と継続的に接点を持つ多くのアクター、プロセス、機関を考慮し、保健外交官は、利害関係者である様々な省庁やグループを含め、交渉の対象となるより大きなエコシステムを慎重に検討する必要があると、本書は主張している。このメッセージを強化するために、他の組織とその交渉プロセスについて説明したテキストボックスを多数掲載した。私たちは本書が、補完的な視点を提供する他の出版物と近々結合されることを期待している。

外交は、かつてないほど必要とされる時期に巨大な課題に直面している。国際政治を分析する多くの人々が、多国間主義が危機の時代に突入したことに同意している。地政学的なパワー・シフトをはじめとする新たな政治的、経済的現実、既存の制度だけでなく、それらの制度が本来基づいていた基本理念をも問い直すことにつながっている。外交のシステムそのものが、この「新たな障害」によって脅かされ、その方法は進行中のデジタル・トランスフォーメーションによって挑戦されている。特にCOVID-19のパンデミックでは、複雑な交渉が対面で行えず、これまで妥協点を見出すために不可欠だった非公式な交流が阻害されてきた。

1 Kickbusch I, Lister G, Told M, Drager N, editors. Global health diplomacy: concepts, issues, actors, instruments, fora and cases. New York: Springer; 2013.

本書の著者として私たちは、グローバルヘルス外交が現在ほど重要であったことはないと確信している。このことは、2015年に採択された「SDGs」における健康の役割について交渉したときに、すでに明らかになっていた。1918年から1919年のインフルエンザ・パンデミック（スペイン風邪）に次ぐ2度目の大流行期である現在、国家間の疑心暗鬼、対立、反目が高まる中、すべての国の健康を確保するために多国間レベルでの協力が最も切実に必要とされている。他方、多国間主義に対する上記のような課題が、グローバルな協力の実現をより困難なものにしている。

すべての人が安全でなければ、どの国も安全ではない。世界保健機関（WHO）の憲章が第二次世界大戦の惨禍の後に起草され、採択された精神である世界的連帯は、グローバルヘルス外交の中核である関係構築と交渉のプロセスを通じて繰り返し強化されなければならない。健康の課題は、国境だけでなく、南北、東西、官民の隔たりを超え、サイロ化されたアプローチの限界を露呈している。このような真にグローバルな課題に取り組むためには、より全体的、包括的、総合的かつ協調的な戦略が必要になる。

グローバルヘルス外交は、国際秩序を十分に機能させることを目指す多国間システムの重要な構成要素である。そのためには、科学と政治の両方が交渉に不可欠であることを認識しなければならない。グローバルヘルス外交の目標は、科学的に信頼でき、政治的に達成可能な合意をもたらすことである。

グローバルヘルスは、本書が探求する3つの柱、すなわちガバナンス・手段・外交で成り立っている。この3つの柱の相互関係が強まっていることが、21世紀のグローバルヘルスにとって必須の推進力となっている。

本書は、グローバルヘルス外交の基礎と様々なアプローチについて理解を深めたい読者の皆様に、その入口を提供することを意図している。本書が、この分野で初めて仕事をしようとする方々の役に立ち、さらに勉強し、何よりも実践的な経験を積む動機付けになることを期待している。また、すでにグローバルヘルス外交に携わっている方にとっても、仕事に役立つ示唆を本書に見出すことができるはずである。また、国内外の機関でグローバルヘルス外交を教える際のサポート・ツールとして活用されることを期待している。